ほない歴史通信
第51号
2009.6.1

都市の活力を導入する知恵に学ぶ

いま、森林とそこを舞台に営まれる林業をめぐる環境に注目すべき新たな動きが生まれている。それを、『平成二〇年版　森林・林業白書』は、「様々な困難を抱えながらも、現在追い風の中にある」と評した。振り返ってみれば、第二次大戦後、とりわけ一九六〇年以降に外材が輸入され始めてから今日までは、森林の価値が軽視され、林業がないがしろにされる過程であったと言ってよい。その結果、今や用材の自給率は二割前後にまで落ち込み、人の手が入らない荒廃した森林が全国に拡がったのである。そこに吹き始めた「追い風」とは…。

一つは、輸入木材価格の上昇である。中国に代表される新興国の木材需要増大や木材輸出国（例えばロシア）の輸出規制の動きが背景にある。二つ目は、京都議定書に明記された温室効果ガス六％の削減約束との関係である。周知のように、日本政府は、六％のうち三・八％分の二酸化炭素を森林に吸収させる計画をたてており、その実現のために間伐等の森林整備を急速に進めている。三つ目は、環境問題への関心の高まりとも関係して森林のもつ公益的機能に対する認識が深まっていることである。国民の森林に向き合う姿勢に変化が生まれ、例えば森林保全や整備等森林づくりにかかわるボランティア活動が活発化しているのも近年の特徴である。

そうしたなか、森林面積の多い山間部の自治体が都市と連携し、都市住民の活力を導入して森林の再生を図ろうとする取り組みが動き出した。森林所有者が個人で担うには荷が重く、また財政力が脆弱であるため自治体の支援にも限界があるなか、森林の再生を可能にする方途として注目に値する。

その一つは、東京新宿区と長野県伊那市の事例である。二〇〇八年二月一〇日、両者は「環境保全の連携に関する協定書」を結んだ。新宿区は、伊那市の森林保全事業に様々な支援を行い、支援の結果生まれた二酸化炭素吸収の増加分を新宿区内の二酸化炭素排出量から相殺するという仕組みがそこには盛り込まれている。年三〇～五〇ヘクタールの森林を整備すると、二酸化炭素吸収量が増加することにより新宿区にとっては年二千～三千トンを削減できる計算になるという。二酸化炭素の削減を迫られる都市、森林整備をすすめ、ひいては雇用の場の確保も期待できる山間部自治体の利害が一致した結果であろう。もう一つ、朝日新聞の社説（二〇〇九年四月一九日付）で紹介された岡山県西粟倉村の「百年の森林創造事業」も興味深い。自分の山とは言え個人では整備ができない、投資もしない昨今、ここでは村役場が個人所有の森林を一〇年間預かり、ひとまとめにして管理するシステムをつくった。さらに、管理のための資金は全国から募り、出資者をファンと位置づけて多彩な交流を仕掛けるという。この二つの事例は、連携によって地域の外から活力を導入しようとする知恵の産物のように思えてならない。

ところで、大子町もつくば市と連携し、つくば市の力を借りて森林整備に取り組むと伝えられている。県内では初の試みでもあり、その行方に注目したい。

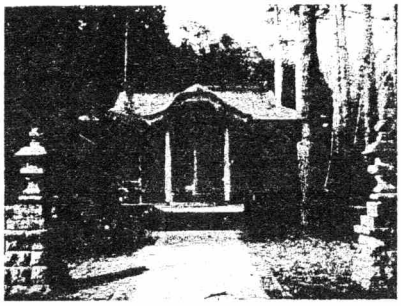
（齋藤）

中郷の熊野権現の大杉と鎮守の扁額

飯村尋道

中郷の奥、名峰都山の南麓に権現堂集落がある。ここに集落の坪神である熊野権現が鎮座する。ご神体は神社なのに幣でも鏡でもなく、一尺程の木彫り仏像三体でかなり古代の作である。

奥州藤原氏の後胤と伝えられる佐藤家の記録によると、天保六年（一八三五）秋九月に水戸烈公（九代藩主徳川斉昭）が八溝登山の帰途中郷村に寄り、境内の幹周り三丈七尺（凡そ十一米）余りの二本の杉の巨木に感嘆し、この一本を譲り受け、江戸小石川藩邸の門扉にしたと記してある。

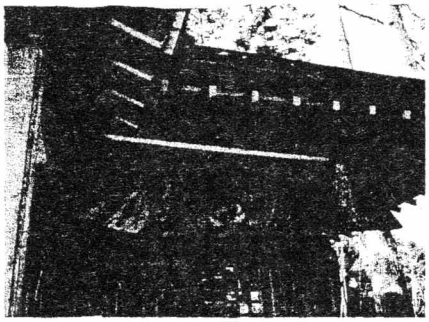


九尺一枚板で厚さ五寸もあったそうだ。烈公より褒賞として金一封を賜わった当主の善兵衛は、このうちの一両二分をもって祠堂を改築したと云う。残りの一本の杉の巨木は惜しいかな天保十四年（一八四二）夏四月十一日の民家の火災で延焼し焼失してしまった。

その後、明治八年（一八七五）二月、この焼失した大杉の根元四分の一を伐採し、上郷村の和田千正に書を請うじて村社中山神社に奉納したとある。

中郷の中ノ平の黒沢小学校旧中郷分教場跡脇の百四十余段の急な石段を登り切ると、ここには旧中郷村の総鎮守である中山神社が厳かに鎮座する。その奉納した扁額は今も拝殿の正面に掲げてある。

爾来星霜百三十年、左の写真の様に拝殿に掲げてあるが、長い風雪により彩色も刻字も薄れて判読は不可能だが、幸いにして昭和五十五年の正月に、拝殿の軒下を見上げながら筆記しておいたのが左記の扁額銘である。（＊正確ではないかもしれないがそのときはご容赦願いたい）



奉納
響字権現堂熊野社前有
碩大杉周三丈七尺餘惜
哉天保十有四癸卯年夏
四月十有一日民家焼失
之日為奮火焼倒々々之
後千今星霜経三十三年
斫乃朽株四分一而作額
明治八乙亥年第二月吉日
願主　佐藤善左衛門
同　佐藤治左衛門
発願主　六十餘翁　佐藤安兵衛
上郷村　和田千正

上郷村の和田千正とは、滋賀県信楽出身の士族で信楽千正ともいい、幕末維新の頃、当地に流れ来て上郷村の金澤家の食客となる。明治初期に上郷尋常小学校の教員筆頭だった和田千松は和田千正と同一人と思われる。和田千正については『郷土の史実』（石井良一著）に詳しく触れられている。

天保十四年から百六十年余りが経った今でも権現堂の熊野神社の前の畑からは、樹齢千年の大杉の根っこの欠片が出てくる。扁額は写真の通り風雪に耐えて、拝殿の軒下に掲げられてある。

【資料紹介】「久慈川上流の勝景地」について

大正十年（一九二一）十一月十五日発行の『イハラキ時事』に、天下に誇るべき「久慈川上流の勝景地」を国井半山が書いている。今から約九十年前の舟生の板橋、大子への釣橋、矢祭山、袋田の瀧の様子などがえがかれ、当時の交通の様子がうかがえる。水戸と郡山を結ぶ水郡線が開通するのは昭和二年（一九二七）三月であるが、当時の人々の、水郡線に期待する声が聞こえてくるようである。ここで、その文章を紹介しよう。

私は三人の友人と連れ立つて、九月二十三日、四度の瀧、矢祭山を視察したのであつた。莫蓙蓑、草鞋、脚絆に旅支度を堅めて、湊（那珂湊）を発つたのであつた。

大宮町に着いたのが、午後の二時、そこで自動車を呼んで置いたので、早速それへ乗つた。雨は相変らず降つて居る。幌を全部かけては、折角の美景が見えないと云ふので、一尺位づつ開けて置いた。

舟生の板橋を渡つて、久慈の急流に沿ふて走つた。鰐ヶ淵の難所は、徐行せしめて危く進む。袋田を過ぎ、朽ちなんとする大子の釣橋を渡りて大子の町に入つた。伊東いはらき編輯長の紹介によつて白石亥三太氏を訪ふた。白石氏の案内で、栄屋と云ふ旅館に入つた。白石氏の呼状で、阿部農学校教諭と斎藤専売局出張所々長がお出でになつた。夕餐ながら談笑の間に大子娘の手踊りなど見せられて、十一時頃散会した。

屋根打つ雨の音に目覚めて、香の高い鮎に舌鼓打ちつつ朝飯を済し、旅装軽く自動車の人となる。町をはづれると久慈川の沿岸を上へ上へと走る。『アレが梁です』と云ふ。川の岸の小屋には七八人の漁師が居た。『此処は降りて下さい』と云ふ。七曲りの険とて、僅か六尺の道が、山の中腹を廻り廻つて行くのであつた。下を俯けば、急流渦を巻きて流れ、仰げば懸崖高く、岩石崩れ落つるかと思はる。五六丁の間を歩くと自動車は止まつて私共を待つて居つた。之れが矢祭神社、之れが大達磨、之れが猿の階山、之れが両達磨岩と云つたやうに、白石氏が説明された。眺めつきせぬ中を帰りを急ぐ為めに、道を返す。

再び大子の町へ入り、袋田の瀧に車を走らせた。釣橋の上を通る時、運転手は川面を見ながら、『あの岩が隠れては、舟生の橋は川止めですよ』と云ふ。

畑の中、山の岸、行くこと十数町漸くにして、山の間より白雲立のぼる所に近づけば、轟々たる響して瀧の落つる音が聞こえた。けれど姿は山の蔭になつて見えぬので、附近の男に道を教へられながら山を登る。雨に濃んだ山の路、水は小川の如く流れて、一尺位のみみず、蛇の如くノタリ歩く、朽ちたる木の葉、折れたる木、人通り少き山路を可なり登つたと思ふ頃、前面開けて、白雲の如き四度の瀧は、眼前に現はれた。『ああ壮快だ』。モー少し行くと、観音堂がある。『此処が瀧全景を見る所なのだよ』とのこと。成程壮観なものだ。此処で小憩して、元来し路を帰る。自動車に乗つて、袋田の宿へ出ると舟生はやはり川止めだとのこと。それでは再び大子籠城の外はないと、引き返して、栄屋に入る。

米国人がコロンビア川沿岸、四十哩（マイル）の行程を全部鉄筋コンクリートで堅めて、世界的の公園として誇つて居るそうであるが、私は之の久慈川沿岸、二十哩の行程を、完全なる道路を造り、此処に大々的な公園を造られんことを茨城、福島の両県に建議するものである。実に雅致に富める此処の勝地を危険極まる道路と、無鉄砲に走らする自動車のみで有ては、到底婦女子の行くを難しとするのみならず、男子も手に汗を握るやうなことが多いのである。彼の道路さい完全に出来たら、実に得難い遊覧地となるであらふ。

（野内）

大子城址

最近、休日や祝祭日を利用して、大子市街の散策に訪れる観光客がふえている。そのためか、町内の知人などから「大子城はどこにあったのですか」「大子城の規模は、どのようであったのですか」などの質問をしばしば受けることがある。

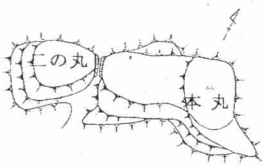
城は防備の施設であり、武士の勢力が拡大した中世になると、領地を見渡せる山頂、あるいは河川や急崖な自然の地形等を巧みに利用して築城されている。大子地方は佐竹氏の支配になるまでは、長い間白河結城氏や岩城氏、佐竹氏の争奪の地であったから、防御施設としての城跡や館跡が残っている。主な城跡として大子城、依上城、池田城（鏡城）、月居城、町付城、荒蒔城、頃藤城等がある。

一　大子城の位置と規模

大子城は押川と久慈川の合流点からやや北西よりの標高二八〇メートルの山頂にある。大子要害とも呼ばれる。年配の人の中には「ゆうがい」と呼ぶ人もいる。

位置的には、北側に宇津坪沢、南側にに槐沢、西側は急峻な山々、東は眼下に大子市街、押川、久慈川があり、展望できる地形的条件を備えた山城跡である。

『新編常陸国誌』によると、「久慈郡大子村押川ノ上ニアリ基地高低一ナラス、高處十間許、東西並低地アリ、西ハ縦二十四間、横十六間、東ハ縦二十二間、横五間、是ヲ本城トス。外城東西四十四間、南北十六間、道廣四間、長サ三十間、下亦平地アリ、東西二十間、廣二十間」とある。『常陸国北郡里程間数之記』に「芳賀河内守の居城なり、坂を登る事数百歩、蹊路狭く、城地高く登り詰めて小塁ありて二段と成る。上段の地十四五間ほど、麓に住居せしにや、上段に櫓を築く而已にして是を要害とせし歟。然共水の手遠し、二町余も下りて汲べき地也」とある。現在、山頂の城跡は、山林に覆われ、遺構を明確に確認するのは容易でないが、南西に細長く二段になっている。中央部よりやや南西よりに空堀があり、二つの郭に区分されている。生活に欠かせない飲料水は槐沢の水を利用していたようである。



大子城跡略実測図
（県重要遺蹟調査報告書Ⅱから）

二　大子城の歴史

大子城の築城年代は不明である。芳賀河内守がはじめて築き、居城していたが、白河結城氏に併合され、長い間白河結城氏の支配下にあった。中世になって陸奥磐城地方の岩城氏が勢力を伸ばして来て城を攻めたので、芳賀氏は鎧淵に身を投じて滅んだ。大子城は岩城氏の支配するところとなり、家臣を遣わして四十余年間守らせていたが（『新編常陸国誌』）、太田城奪還に成功した佐竹義舜は、山入氏の勢力が強かった山田川沿いを北上して生瀬に進出し、永正七年（一五一〇）大子城を攻めたので落城し、廃城となった。大子城は保内と水戸や陸奥国を結ぶ南郷街道の押さえとして重要な役割を果たしていたといえる（『大子町史　上巻』）。

三　大子城にかかわる小字地名

現在、大子城にかかわる小字地名に宇津坪沢、奉行平、近町等がある。明治十九年（一八八六）頃に出された『大子村地誌料』の中に地名のいわれが書かれている。

・宇津坪沢：もとは空穂沢、旧字名は靫沢、この地は大子城主芳賀河内守が討死の日に靫を捨てた場所といわれている。靫は空穂と同じで弓矢入れて腰や背につける道具をいう。

・奉行平：大子城に近く、城主芳賀氏時代に代官屋敷のあったところであるという。・近町：大子城に近いところから名づけられた。士農雑居の町屋敷であるという。（小　澤）

忠魂碑（二）～建設の主体と題額の染筆等～

忠魂碑は日露戦争後、日本が欧米列強に対抗できる国内体制づくりの中で、日清・日露戦争の英霊を祀るために建設されたものである。大子地方の忠魂碑の建立場所を見ると、既に道路の拡幅工事、鉄道の敷設工事等で移動しているものもあるが、神社の境内、村の中心地、道路沿いの土手の削平地、集落を見渡せる高台、旧役場支所敷地などに建設されている。

忠魂碑はお国のために忠義を尽くして戦死した人の英霊を祀っている碑である。依上地区や生瀬地区等の忠魂碑には、戦後太平洋戦争の戦没者が合祀され、日清・日露戦争から太平洋戦争に至るまでの地元の戦没者の名前が記されている。因みに依上地区は昭和三十三年三月一四九名が合祀、生瀬地区は昭和三十五年九月一四四名が合祀されている。

このように忠魂碑に祀られた祭神は、お国のために戦死した英霊として顕彰されたのである。しかし、現在は遺族関係者を除いては、忠魂碑への関心が薄れ、余り気にとめる人もいなくなってきている。

○忠魂碑建設の主体

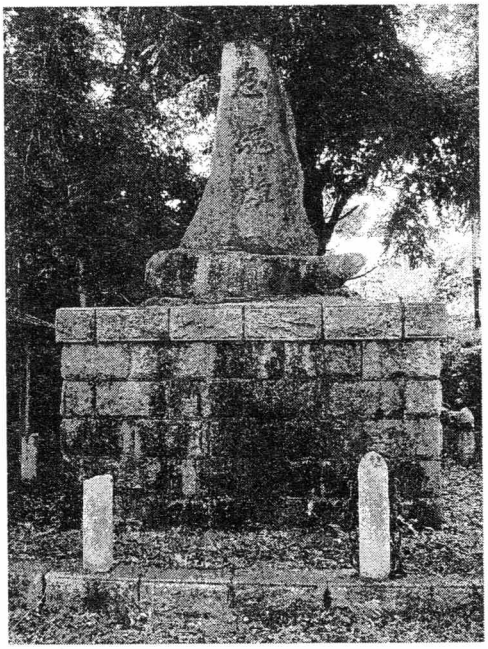
建設年月は、上小川地区は日露戦争後間もない明治三十九年（一九〇六）十月の建設で他の地区より早く建設されている。他の地区は大正十年（一九二一）以降の建設が多い。因みに佐原地区は、大正十年三月、大子地区は、大正十年十月、依上地区は、大正十二年、生瀬地区が昭和三年（一九二八）四月建設である

忠魂碑の建設の主体をみると、上小川地区の碑は「村の有志」によって建設されているのに対し、他の地区は「帝国在郷軍人会各地区（旧町村）分会」によって建設されている。

在郷軍人会は、日露戦争後地域住民に軍国思想を普及し、住民の戦争への協力、青年層の日常の軍事教練等の指導を行うために在郷軍人会が結成された。さらに日清戦争後、在郷の予備役軍人の団体として各地区に軍友会が結成されたが、明治四十三年（一九一〇）十一月軍部の指導のもとに全国の在郷軍人を組織化した帝国在郷軍人会が設立され、各地区に在郷軍人会支部・分会が成立した。これを機に忠魂碑の建設は、在郷軍人会支部・分会が建設の主体となった。

旧大子町の忠魂碑の左側面にはめ込まれてある銅板に「由来」が記されている。それによると、

「本碑は日露戦役以来、大正九年尼港事件に至る間勇路に征途に上り、困難に殉じる有志の英霊を合祀し、赫々たる武勲を長く国民の亀鑑（きかん）として後世に伝うべく大正十年十月十日、当時帝国在郷軍人会大子分会長永瀬三四郎以下会員一同の発起する所となり、町民一般の芳志協力に依り建設せられたるものなり」



大子地区の忠魂碑
（昭和３１年９月修復し、合祀祭挙行）

とあり、日露戦争をはじめ大正九年（一九二〇）の尼港事件で国難に殉じ、勇壮に戦った英霊を合祀し、国民の模範として後世に伝えていくために、在郷軍人会大子分会が中心となり、会員をはじめ、一般町民からの芳志の協力を得て建設している。

○忠魂碑題額の染筆者

戦没者遺族の悲しみや苦しみを癒し、また戦闘意欲を鼓舞していくためには題額の染筆を誰にするかは、大きな課題であった。大子町域の中で書かれている染筆者を見ると大将クラス以上が多い。

大子地区：陸軍中将田中義一書
依上地区：元帥子爵上原勇作書
佐原地区：陸軍大臣田中義一書
黒沢地区：陸軍大将大泊尚敏書
宮川地区：安正書（帝国在郷軍人会副会長福島安正）
生瀬地区：元帥子爵上原勇作書
袋田地区：元帥子爵川村景明（かげあき）書（帝国在郷軍人会会長）、
上小川地区：陸軍少将富岡三造書
下小川地区：安正書（帝国在郷軍人会副会長福島安正）

各地区の執筆者を見てわかるように、元帥、大臣、帝国在郷軍人会会長、副会長など、大将の位以上の人に依頼して書かれている。

忠魂碑は、昭和二十年（一九四五）八月十五日の敗戦を迎えるまで戦没者遺族ばかりでなく、多くの国民の日常生活の中に根強く「お国のために戦った戦没者を祀った顕彰」として根を下ろしていった。

しかし、敗戦によって日本の民主化、非軍事化を目指す占領軍の政策により世相が一変し、日清・日露戦争以来太平洋戦争までの戦没者の英霊を祀った忠魂碑への国民の感情は薄れていった。

（小澤）

編集後記

平成二十一年度に入り、四月二十五日（土）に「遊史の会」の諸先生方にお集まりをいただき、今年度の主な事業について検討し、次のような事業を進めることになりました。

一「ほない歴史通信」の発行
一　満洲移民関係の資料収集及び研究
一　ふるさと歴史講座現地めぐりの開催

大子町では五月三、四日の両日、十二所神社の春季例大祭と四年に一度の祭礼「大子ぶんぬき」が行われ、屋台七台が繰り出され、はやしの打ち合いをしながら町内を練り歩きました。

また、十六、十七日の両日には「常陸国ＹＯＳＡＫＯＩ祭り」が行われ、趣向を凝らしたカラフルな衣装に身を包んで踊りを披露しました。伝統あるお祭り、これから伝統を創っていくお祭り、いずれのお祭りも大子町を活気づけ、そして見物客を魅了するお祭りであり、今後も伝統を築きあげて行ってほしいものです。

（斎藤裕也）

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
野内　正美（茨城県立日立商業高校）
石井喜志夫（元　教　員）
小澤　圀彦（元　教　員）
斎藤　裕也（大子町教育委員会）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町池田二六六九番地
〒319-3551　☎0295（72）2627